第一席

負犬賛歌

愛知県立豊橋東高等学校　一年
山本草太

赤い木にとまる君の羽に
ただ触れてみたいと思った
紅葉の匂いの香る夕方に
フェンスの向こう側へ別れを告げる
ただずっと考えている

はじめましては二度言えないこと
それがただ悲しかったこと
さよならをもう一度言いたいこと
それがただ叶わなかったこと

夕日の差し込む十字路に
行かせてくれない恋敵
「全部僕が悪いんだろ」と
夜空になんど吐いただろう
神は何光年先にいる？
応えてくれても良いだろう

落ちた夕日はまた昇る
きっとそうだと信じ寝る

どうせ全部消えていく
諦めたくてでもできなくて
同じこと頭の中で
繰り返す数多の時に
自分でも呆れてる

高尚な一筋の光
そんなものは見たことないけど
茨の道なら目前に
摘まんだ西洋弟切草

歩き始める最後尾
「先頭じゃなきゃおかしい」と
進め
進め
進め自分
俺が応えるしかないだろう？

負け犬に捧げる
讃歌

第二席

砂時計

愛知県立成章高等学校　二年
鈴木　愛菜

私はただそれを眺める
少しずつ減っていくそれは
火が灯ったろうそくの「ろう」のように
パンケーキにのった「バター」のように
小さな波がゆっくり迫りかけてくる

私はただそれを持ち上げる
上から下へ移っていくそれは
降りしきる粉雪のように
ふわりと舞い降りる綿毛のように
重力に抗えず落ちてくる

私がそれを眺めると
優雅に流れ行く「時」は私を落ち着かせ
私がそれを手放すと
刻々と進む「時」は私を不安にさせる

テスト、締め切り、明日の朝
必然と訪れてくるものが
大きな波となって私を飲み込む
無駄だとわかっていても
私は抗う
「時」が流れ続ける限り
私はそれをただ眺めるだけ

第三席

人生は

私立名古屋高等学校　一年
福田　匠翔

人生は回転ずしだ
決められた皿の上で
決められたネタをかぶって
決められたレーンを流れ
食べられればそこでおしまい
食べられるという偶然は
時間がいずれ連れてくる
そうして偶然がくるまで
流れて廻って時間は進む

人生は一本の木だ
偶然に種から生まれ
生まれた場所が悪ければ刈られ
生まれた場所が良ければ育ち
日当たりの悪さとか嵐とかは
時間がいずれ連れてくる
そうして何か起きるまで
木は伸び続け時間は進む

人生はメガネだ
きっちりとフレームに収まって
髪や眉は変わっても
変わらぬ一人にかけられて
割れてしまえばそこでおしまい
時代に置いて行かれてもおしまい
いずれは置いて行くくせに
向こうを向いて時間は進む

人生は今だ
今という時間が
過去を引っ張って進む